

※本告辞は英語により行われたものであり、以下はその日本語訳を掲載しています。

2026 年 10 月 1 日

令和 8 年度 10 月 入学式 学長告辞

九州工業大学長 安永卓生

この 10 月の良き日、九州工業大学に入学された皆さん、ご入学おめでとうございます。国内の各地から、そして海外から、遠い道のりを経てここに来られた方も多いことと思います。これまで皆さんを支えてこられたご家族、恩師、関係の皆様にも心より御礼申し上げます。教職員を代表して、皆さんを九州工業大学に心から歓迎いたします。

本学は 1909 年、私立明治専門学校、通称「明専」として開校しました。開校にあたり初代総裁・山川健次郎先生が掲げた建学の理念は、「技術に堪能なる士君子」の養成です。この理念は、今も本学を貫いています。「士君子」とは、『荀子』などの中国古典に由来する言葉で、学識と高い品格を備え、社会から信頼される人を指します。明専の先人たちが求めたのは、単に腕の立つ技術者ではありませんでした。技術を深く究め、それを社会のために賢明に使うことのできる人でした。

それから一世紀余り。この建学の精神は、本学の「ビジョン 2040」——「Impact the Next Industry」——に受け継がれています。私たちは「モノづくり」と「ひとづくり」から新たな価値を生み出し、それを社会に実装し、イノベーションを起こすことを目指しています。しかし、技術がひとりで産業を、そして社会を変えることはありません。何をつくるのか、なぜつくるのか、誰のためにつくるのか。それを決めるのは、いつの時代も人です。だからこそ「士君子」という考え方は、時代を超えて意味を持ち続け、今こそ一層重みを増しているのです。

では、ここで一つ問いかけをしたいと思います。「技術」とは何でしょうか。

私たちは「技術」と「技能」を同じような意味で使いがちですが、ここでは二つを少し分けて考えてみましょう。技能は、実践を通して人の内に蓄えられる力です。熟練の職人の手は、言葉では説明しきれないことを知っています。それは尊いものですが、人に伝え、確かめ、共有することは容易ではありません。これに対して技術は、形式知、すなわち言葉で説明され、原理によって確かめられ、他者と共有できる知識に裏づけられています。実際、technology という言葉のギリシャ語の語根は、「わざ・技能」を表す *technē* と、「説明・理」を表す *logos* です。すなわち、わざを言葉と原理で捉えるという発想です。だからこそ技術は、教えることができ、他の人

が改良でき、これまでにない問題にも応用できます。これが技術と技能の違いです。皆さんが大学で学ぶ意味もここにあります。「どうやるか」だけでなく、「なぜそうなるのか」を理解するためです。

そのうえで、学んだ知識を実験や実践を通して自らのものとし、暗黙知としての技能までも身に付けてください。さらに、研究室や学会での議論を通してそれを仲間と分かち合い、改めて言葉にして形式知として捉え直し、他者と共有できる技術へと育ててください。

さて、皆さんは、AI が社会のさまざまな場面に組み込まれる時代に学びを始めます。AI は、プログラムを書き、論文を要約し、設計案を数秒で示してくれます。「AI が答えを出してくれるなら、私たちは何を学ばばよいのか」と問う人もいます。

私なりの答えはこうです。AI は解の候補を示します。しかし、その解を選んだ責任まで引き受けてはくれません。その解は正しいのか、安全なのか、この状況にとってふさわしい答えなのか。それを決めるのは、知識と技能に裏づけられた思考力と判断力を持つ人間です。AI が強力になればなるほど、皆さん自身の判断力の重要性は増していきます。

その判断は、問いから始まります。何を問うべきか。本当にこれが正しい問いなのか。この答えに欠けているものは何か。なぜこう答えたのか、別の道はないのか。先生や仲間に問いかけるのと同じように、ぜひAI も壁打ちの相手として積極的に使い、何度でも問いをぶつけてください。ただし、返ってくるものの質は、皆さんが何を、どのように問うかによって大きく変わります。AI の時代にあって、問い続ける力、すなわち「問う力」こそが、あらゆる学びの土台なのです。

ここで、研究について話をさせてください。皆さんの多くはこれから、学生として学びながら、自ら判断する場面に向き合います。では、学生から研究者・技術者へと成長する、その転換点はどこにあるのでしょうか。

基礎を学ぶ授業では、一定の条件と前提のもとに、正解が用意されていることがあります。しかし研究では、条件や前提そのものから確かめなければなりません。研究とは、まだ誰も答えていない問いを立て、根拠を集め、「私はこう結論する」と決めることです。その過程で、皆さんは次々と判断を迫られ、その一つひとつに責任を負うことになります。その判断を説明し、根拠を示し、異なる見解と向き合って議論し、誤りがあれば正さなければなりません。皆さんが身に付けるエンジニアリングとは、制約の中で判断し、その結果に責任を持つ営みです。この「判断」と、それを担う「責任」こそが、学生として学ぶ皆さんを、研究者や技術者へと成長させる仕掛けなのです。

もう一つ、身に付けてほしい力があります。「汎化する力」です。皆さんの研究は、一つの材料、一つのアルゴリズムといった、とても具体的なものになるでしょう。しかし大きなインパクトは、一歩引いて「ここに潜む原理は何か」「他のどこに応用できるか」と問うたときに生まれます。知識を汎化することで、思いがけない分野とつながり、異なる専門を持つ人々と協働することができます。ここでもまた、始まりは問いです。

最後に、「プロフェッション」という言葉についてお話しします。この言葉は、ラテン語の「profiteri」——「公に宣言する」——に由来します。プロフェSSIONナルとは、社会の前に立ち、「私はこの知識を持っている。それを正しく使う責任を引き受ける」と宣言する人のことです。このプロフェSSIONナルの姿は、明専の先人たちが掲げた「技術に堪能なる士君子」と、深く重なります。知識に裏づけられた判断を説明し、その結果に責任を引き受ける。AI の時代だからこそ、この姿勢が皆さんに求められます。

皆さんに三つのお願いをします。

第一に、確かな知識を身に付けてください。技能を技術へと高める知識です。

第二に、問うことをやめないでください。先生に、仲間に、生のデータに、AI に、そして自分自身に。

第三に、判断を人任せにせず自ら下し、その責任を引き受けてください。

この三つを実践すれば、皆さんは次の産業、そして次の社会で働くだけでなく、それらをつくり、イノベーションを起こす人になると信じています。

改めて、九州工業大学へようこそ。皆さんの問いが、皆さんをどこへ連れて行くのか、楽しみにしています。